玉川大学学術研究所紀要　第23号：7–17（2017）
Tamagawa University Research Review, 23, 7–17 (2017).

英語絵本の読み聞かせの身体性と聞き手の理解（2）
――小学校英語における英語絵本の身体性を活かした読みあいの試み――

松本由美

Reading English Picture Books with an Application of Non-verbal Communication at Japanese Public Elementary Schools

Yumi Matsumoto

Tamagawa University Research Institute, Machida-shi, Tokyo, 194–8610 Japan.
Tamagawa University Research Review, 23, 7–17 (2017)

Abstract

Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology Japan (MEXT) has promoted reading English picture books to children in English classes at public elementary schools with its public announcement, in which reading with some non-verbal action such as facial expressions, a tone of voice, and some physical gestures. This strategy will efficiently increase audiovisual input. However, it might not promote understanding the meaning of the text because it does not consider the theory of second language acquisition; input- interaction theory by Long (1996).

In this paper, I will propose the specific strategy of reading English picture books with children which is consistent with the Input-Interaction Hypothesis by Long (1996). Participation to the reading will activate multiple senses of the children, which promote understanding the text empirically. This strategy also encourage the children to engage deeply with picture books leading to “critical thinking and meaningful learning.” (Arizpe and Styles, 2016)

キーワード：英語絵本，読み聞かせ，読みあい，身体性
Keywords：English picture books, reading to children, reading with children, non-verbal action

1．はじめに：小学校英語に英語絵本の読み聞かせが導入される背景

2020年から実施される新学習指導要領が2017年3月31日に公示され，すべての公立学校における小学校に5，6年生においては外国語[1)]が正式に教科として導入されること，また小学校3，4年生においては外国語活動が義務付けられることが決定した。小学校への英語教育導入の必要性が，初めて提言された1986年の臨時教育審議会（臨教審）答申から，実に30余年を経て実現されることになる。今回の小学校英語改革の直接の端緒となった，2015年5月の教育再生実行会議の最終提言からも，約2年の歳月を経て，ようやく小学校英語の教科化が正式に発進した。

ただ，2020年度からの実施とは言っても，2018年度からは新学習指導要領の円滑に実施するための移行措置期間に入るため，前倒しで2018年度より新学習指導要領に則った外国語科や外国語活動を実施する小学校も少

玉川大学リベラルアーツ学部リベラルアーツ学科

なくない。従って早急に新しい学習指導要領への対応が必要なのである。中でも，初めて英語を導入する小学校3, 4年生には, 制度的にはこれまで小学校5, 6年生に行っていた外国語活動が下りてくるのだが，これまで5，6年生に使用していた教材や指導法が，発達段階の異なる3，4年生にそのまま使用できる訳もなく，小学校3，4年生に合った教材やその指導法の開発は喫緊の課題である。

こうした状況の中，文部科学省は小学校3，4年生外国語活動における対応策の一つとして，英語絵本を副教材として取り入れる方針を打ち出している。[2] この絵本は，文部科学省が教材用に独自に開発して，既に2016年度4月には研究開発校に配架し，1年間の効果検証を終えている。絵本の読み聞かせは，一般的にも年齢にかかわらず良いものと認知され，また様々な研究において教育的効果も認められているが，多くの研究は母子間の読み聞かせや，幼稚園，保育園など幼児を対象とした研究のようである。小学校児童を対象とした読み聞かせは，その研究の途についたばかりであり，読み聞かせがどのような効果をもたらすのか，また，どのような絵本を，どのように読み聞かせをするのが効果的であるのかは，実証されていないようである。ましてや日本人児童の母語ではない英語絵本を英語教育の場で読み聞かせることが，小学校3，4年の児童にどのような影響を及ぼすのかについては，これからの研究を待たなければならない。段落冒頭に述べた文部科学省が開発した英語絵本に基づいた読み聞かせの効果検証を待ちつつも，新学習指導要領の先行実施も見越して，小学校英語教育において効果的な英語絵本の読み聞かせについての研究を急ぎ進める必要性があると考えている。

日本の小学校英語教育にふさわしい英語絵本については，文部科学省から先に補助教材として発表された“Good Morning”（小学校4年生用）と“In the Autumn Forest”（小学校3年生用）の2冊の内容分析とともに，松本（2017b）に示したので，そちらを参照されたい。本稿では，小学校中学年の児童に対して，英語絵本の内容理解を深める読み聞かせ方に特化して以下の順で検討する。第2章では，絵本の読み聞かせとは何か，それは児童にどのような効果をもたらすのかを述べる。第3章では，本稿の主題である絵本の読み聞かせと身体性との関わりを述べてから，小学校中学年児童に行った身体性を生かした英語絵本の読み聞かせを報告する。第4章では，その実践から明らかになったことや，今後の検証を待たなければならないことを述べる。最後に全体をまとめる。

2. 英語絵本の読み聞かせについて

2.1 絵本の読み聞かせとは何か

この章では，英語絵本の読み聞かせとは何かについて述べなければならない。まず，絵本についてだが，統一された定義は無く，さまざまな研究者がそれぞれの見地から述べている。例えば生田他（2013）では，「絵本はテキスト（ことば･文章）とイラストレーション（図象･絵）で, さまざまな「情報」を伝達する表現媒体である。」と定義している。しかし，絵のない絵本や，ページが綴じられているという形状を活かした絵本なども発表されているので，本稿では，これらも絵本の特性と捉えて松本（2017a）の定義を用いる。即ち，「絵本は文字通り，少なくとも「絵」が存在し，形状的には各ページが何らかの形式で綴じられている。また，一冊の絵本の絵と絵の間には，ある種の連続性が存在する。」これが「絵本」である。文字のない絵本はあるが，絵のない絵本は表現形式として成り立たない。しかし，ただ絵があればよいというものでもなく，絵本であるためには，作者が意図する何らかのつながりが存在しなければならない。それは典型的には物語性というつながりだが，例えば図鑑に近い知識絵本のようなものにおいても，動物や乗りものの集合としてのまとまりや歴史の変化のような時間の流れなど, 絵本は何らかのまとまりを持っているのである。また，絵本はその綴じられているという形状的特性をも持っている。このことにより，ページをめくるという身体的動作を希求し，めくられることにより移り変わっていく絵と絵の間に何らかのつながりが生まれる。絵本は綴じられているという点においても，他の様式，例えば紙芝居とは異なる表現形式である。

絵本は，その形状的特徴から人間のかかわりを要求する。まず，絵本は先に述べたように，綴じられているという形状から，必然的に「めくる」という人間の動作を要求する。つまり，誰かの手によってページをめくられなければ，絵本としての機能を果たすことはできない。また，絵本には絵はあるが，音声は存在しないので，読み手の存在がなければ機能しない。[3] 必ず音声は人間が補わなければならないのである。また，絵本の多くは文字が包含するが, 子どもが初めて絵本に遭遇するときは,

その文字を大人に読んでもらわなければならない。さらに，文字無し絵本においては，音声だけではなく，絵と絵の連続性を読み手が解釈して，文言をつけたしてもらわなければならない。また，音声の欠如は，擬声語，擬態語も必要に応じて読み手が補うことにつながり，これも絵本の特性であろう。こうして絵本は，読み手という人間を要求するし，聞いてくれる人がいなければ絵本の存在意義は無いから聞き手の存在をも必要とする。つまり，絵本はその特性から，少なくとも聞き手が文字を読めない年令においては，読み手が聞き手に絵本を分かりやすくするための効果音なども補いながら，読んで聞かせる，読み聞かせを前提とした媒体なのである。

従って，絵本は，人と人を結びつけるメディア，しかも直接的に結び付けるメディアになる。一冊の絵本という同一の物を，同時に同じ空間を共有して読むことを前提とするからである。絵本と人間との出会いは，恐らく大人が選んだ本を子どもに読み聞かせるというものである。そして，絵本が結びつける人と人は通常，乳幼児とその保護者である大人たちである。絵本は，初めての体験を生じさせ，読み手の大人と聞き手の乳幼児という，人間関係を生じさせるコミュニケーションメディアなのである。今井・中村（1993）はその冒頭で，絵本が人間の成長にとって重要な役割を果たしていることを述べた上で，絵本と乳幼児との出会いは，「親（または他の養育者）による文章の「読み聞かせ」という場において実現されるのである。」と述べている。

2.2　絵本の読み聞かせの効果

このように，絵本の読み聞かせの多くは，養育者である大人と乳幼児の間で行われ，その効果についても検証されている。絵本を介して形成される人間関係がコミュニケーションの原型の一つを形成し，またその後の読書体験にもつながることは間違いないのであろう。しかし，具体的にどのような効果があるのかについては，未だそれぞれの立場から検証中である。松本（2017a）では母子間の英語絵本の読み聞かせがもたらす効果について実験を行い，のちに述べるように，「コミュニケーションの始まりである『相手の話を聞くこと』を，読み聞かせの中で覚えさせられるのかどうか」については，肯定的な結果が得られた。

しかし，この親子の読み聞かせが言語（英語）習得に効果があったのかどうかは，検証中である。実験では，絵本というメディアを媒介しながら，母親の声で語られる言語に耳を傾け，さらに母親を模倣し，母親がページめくりの動作と同時に，または続いて発した言語（英語）音を，模倣した。この時被験者である幼児が発した音声が，言語として何らかの意味を伴って発生した言語音なのか，あるいは，一連の動作の中で母の発話に続いて自分も発声するというだけの，手続き的な発声なのかは，この実験では明らかにならなかった。しかし，動作に伴って母親を模した音声を発したということは，母親の発話を聞き，模倣しようとしたというところまでは，明らかになったものといえる。

そこで，小学校の外国語教育に英語絵本を用いるとの発表を踏まえつつ，これまでに明らかになった絵本の読み聞かせの効果を生かして，さらに言語（英語）の習得をも促進する読み聞かせをしたいと考え，2017年3月「英語教育強化地域拠点事業」の研究開発学校にて読み聞かせを使った英語活動を行わせていただいた。前述の親子に行った読み聞かせ実験結果に基づき，読み聞かせにおいて，ページをめくる，絵本の絵を指さす，さらに対応する自分の身体に触れると言った身体の動きや動作が，理解を促進するとの仮定を立て，身体動作を伴う英語絵本の読み聞かせを行う授業案を提案し実施している。第3章では，文部科学省が絵本の読み聞かせに求める効果を述べてから，その効果を得るために相応しいとしている読み聞かせの方法としてあげているものが，具体性を欠いていることを指摘する。その後，英語絵本の読み聞かせを英語の習得に結びつけるための工夫を，第二言語習得の知見を用いて提案する。

3. 小学校英語教育における英語絵本の読み聞かせの実践 [4)]

3.1　文部科学省が求める英語絵本の読み聞かせ

この章では，まず文部科学省が，どのような意図で英語絵本を取り入れようとしているのかを確認しておく。「中学年を対象とした絵本活用に対する基本的な考え方」（文部科学省 2016）によると，英語絵本を取り入れるメリットは以下の通りである：

①コミュニケーションは，「話す」ことというより，相手の話を「聞く」ことから始まる。聞いて相手の話していることがわかる体験をたくさん児

童にさせることが大切である。そこで，児童に聞かせる工夫の１つとして，絵本の読み聞かせが考えられる。

②絵本の絵から情報を読み取り，状況を理解しながら，児童は相手の話を聞くことになるため，「聞いてわかる」体験をさせやすい。

③また，選ぶ絵本の内容によって，現実には起こり得ないことを絵本の世界で体験することもできる。

④さらに，昔話の中には，生きていく知恵や教訓的なことが組み込まれている場合もある。

⑤このようなことを踏まえ，外国語活動でも，外国語による絵本の読み聞かせを行うことが考えられる。絵本を題材に，グループでオリジナル絵本を作ったり，物語を劇やペープサートを使って演じてみたりさせることで，絵本の内容をより理解することにつながる

（「中学年を対象とした絵本活用に対する基本的な考え方」文部科学省
下線は原文のまま，段落変え丸数字の付与は本稿筆者による。）

また，このような，意図を達成するために，指導者がどのように英語絵本を読み聞かせるのが良いのか，その読み聞かせ方についても，同じ文書の中で，次のとおり述べている：

・指導者は，ジェスチャーをつけ，表情豊かに読む。これらも児童にとっては，物語の筋などを理解するための大切な情報源となる。

・単に絵本に載っている文言をそのまま読むのではなく，児童に絵本の絵や筋について時折質問をしながら，児童を絵本の世界に引き込むようにする。

・ページをめくる際には，次に何が起こると思うかなど発問し，児童につぎの話の展開に興味をもたせる。そうすることで，次はどうなるだろうと児童はより興味をもって，指導者の読み聞かせを聞くと思われる。

（「中学年を対象とした絵本活用に対する基本的な考え方」文部科学省
下線は本稿筆者による）

上記の文言のうち実線を付した部分は，文部科学省が絵本を読む読み手に求めている読み方，波線はその読み方によって目指す児童の反応である。文部科学省によると，「ジェスチャーをつけ，表情豊かに，時折質問をしながら絵本の世界に引き込むようにし，ページをめくる際には，次の話の展開に興味を持たせる。」ことで，「児童はより興味をもって，指導者の読み聞かせを聞く」ということであるが，誰しもがこの指示を読んで効果を上げられるわけではない。児童の集中力を欠くことなく，物語を理解しようとする態度を保ち物語世界に引き込んで，なおかつ英語活動として成功させるためには，もう少し具体的で，第二言語習得の理論に依拠した系統だった工夫が必要なことは明らかである。

次節では，その読み聞かせを成功させる工夫とは何かを紐解き，効果の均質化を図る。小学校での英語活動は公立小学校の必修の活動であることを鑑み，どの小学校のどの指導者つまりどの読み手が読んだものあっても，その絵本の読み聞かせがすべての児童に等しく教育的な効果があること，すなわち物語を理解しながら，児童を英語らしい音声や表現に慣れ親しみませることができ，さらに英語の音声と絵本の絵で，単語や文のおおよその意味を理解させる必要がある。

3.2　英語絵本の読み聞かせが英語習得を促進する条件

3.2.1　第二言語習得論：インプット仮説（Krashen 1977–）

小学校の英語活動の中で行う，英語絵本の読み聞かせは，まず，聞き手の児童にとって母語ではない，いわゆる第二言語であるという点で，日本語の読み聞かせとは，教育的効果を上げる条件が異なる。英語絵本の読み聞かせの場合は，児童が読まれている音声を聞いて，必ずしもことばの意味を全て理解しているとは限らないし，絵本のようにまとまった文レベルでの理解となると，意味理解はかなり難しくなる。また，その理解度は日本語の読み聞かせの時に比べて，個人差が大きくなることも想像に難くない。従って，英語絵本を読み聞かせるときには，母語ではない第二言語がどのように，理解され習得されていくのか考慮しなければならない。

インプット仮説とは，元々 Krashen が，1977 年に発表しその後改訂を重ねてきている理論だが，第二言語習得におけるインプット[5]の必然性を述べたものである。様々な論議を呼びながらも，第二言語を習得する際には，

インプットの存在が必要であるという点においては，研究者たちの意見も一致している。その中心をなすのは，インプット条件と呼ばれるものだが，第二言語習得の際には第二言語のインプットが必要であり，そのインプットは「i + 1」いう，周囲からの少しの助けがあれば理解できる程度のものでなければならないというものである。

英語絵本の読み聞かせの際，読み手が読み上げる言語音は，児童の理解の助けとなるような何らか工夫により，意味の推測をさせることができて初めて，インプットとしての役割を果たすことができる。いくら読み聞かせても，児童がその意味を理解しなければ言語音ではなく，ただの音になってしまうのである。その工夫は，前掲の文部科学省の「中学年を対象とした絵本活用に対する基本的な考え方」によると，絵本の絵であったり，ジェスチャーなどである。これらは，決して間違いではないが，英語絵本に使われている文言や，話の内容を理解させるためには，さらに「身体性」を活かした英語絵本の読み聞かせというものを提案する。前述の母子の読み聞かせ実験において，読み手や聞き手の身体動作とともに，語彙の発話が増加する状況が多く見られたので，英語活動における集団に対しての読み聞かせにおいても，何らかの効果があるのではないかという，仮説に基づくものである。本稿での「身体性」は松本（2017a）に述べたような，絵本の形状が持つ身体の動作を希求する特性，選書された絵本の絵や文言といった情報が身体動作を誘発する身体性も，もちろん除外はしないが，本稿でコミュニケーション活動と捉える読み聞かせが，希求あるいは誘発する身体性，例えば，読み手や聞き手の身ジェスチャー（身体動作），表情，声，といった身体と関わる非言語表現（身体表現）などを，中心として論じる。

3.2.2　第二言語習得論：インプット―インタラクション仮説（Long 1996）

またLong（1996）は，Krashenのインプット仮説の修正理論として，インプットーインタラクション仮説を提唱している。Long（1996）は，第二言語習得の際，「i + 1」のインプットに引き続き，対話者間の意味のある（単なる会話練習ではない）対話をすることが重要で，そのインタラクションを通して第二言語がより効果的に習得されていくと述べている。この対話者間の交流はインタラクション（相互交流）と呼ばれているが，ただの発話練習に陥ることのない意味を持った対話（意味交渉）であることと，指導者が間違いを指摘するのではなく，正しい表現を示して，気づかせること（暗示的修正），さらに学習者が興味と集中力をもってその対話に臨んでいること（学習者の注意）が必要だと主張されている。

この仮説を絵本の読み聞かせに当てはめてみると，インプットは絵本の読みによって音声情報が与えられ，「i + 1」の「1」にあたる補足情報は前節で述べた身体性を用いることで達成される。しかしLong（1996）の提唱する相互交流を，どのように確保するのかが問題になる。また，学習者の注意を惹きつけ継続させることも必要である。このインプットーインタラクション理論を踏まえて，本稿では読み手から聞き手への一方向のコミュニケーションである読み聞かせではなく，相互交流を可能にするつまり，聞き手である児童からの自発的な反応を引き出し，その反応を見て読み手も読みを変化させていける双方向のコミュニケーションである「読みあい」[6]を提案したい。

3.3　英語絵本の読み聞かせから読みあいへ

「読みあい」という用語の定義は統一されたものはないが，本稿では，絵本の読みを様々な身体動作や身体表現，絵本の絵も用いながら児童の理解を助けるように，絵本を読んで聞かせることを読み聞かせと呼び，読み手から聞き手への一方向のコミュニケーションになる。こうした読み聞かせに加えて，児童の反応を引き出して拾い上げ，読みをダイナミックに変化させつつ進めていく読みを，「読みあい」と呼ぶことにする。（以降，「」を付さず，読みあいと記す。「読み合い」と漢字を使った表記の仕方もあるが，表記と定義は連動していない。）読みあいは，その後聞き手からの反応を待ち，引き出し，絵本を媒介としながらも，ある程度の聞き手の自由な反応を許容し，聞き手の反応に対して読み手が応じながら，絵本の読みを進めていく，双方向のコミュニケーションである。この読みあいのやり取りの中にこそ，両者の関係を構築しながら，相互に理解を深めていき，読み手も聞き手も成長できる可能性が生まれると考える。

この英語絵本を読みあうことで，聞き手である児童にどのような効果がみられるのか，読み手であり授業者である大学生にどのような成長や変化がみられるのか検証したく，公立小学校にて検証授業を行わせていただいたので，次章で報告する。

4. 検証：身体性を持った英語絵本の読みあいと児童の理解

4.1 方法と手続き

これまで見てきた身体性を生かして行う英語絵本の読みあいが，公立小学校英語活動の場面で有効なのかどうか確認するために，小学校3年生ですでに小学校英語活動を行っている教育特別区の研究開発校である小学校にお願いをして，検証授業を行わせて頂いた。通常の公立校で英語活動を行っていないので，英語絵本の読み聞かせの体験も無く，読みあいの効果を検証しづらいと考えたからである。時期は3月のはじめ，学年を振り返りを兼ねて，児童がどの程度初めての経験となる読みあいに対処できるのかを見る機会ともなった。授業内容，選書については，事前に本稿筆者と小学校の英語専科教員，学校図書館司書，校長先生と，打ち合わせをしつつ進めた。授業者は，小学校英語指導者資格を目指す大学4年生が二人で，二人が組になり授業をするティームティーチングで行った。読みあいを使った英語活動指導の仕方を，本稿筆者と大学生が打ちあわせ，練習をしてから授業に及んだ。児童への効果とともに，大学生の授業前後の所感を聞き，読み手としての大学生も成長するのかどうか確認したいと考えた。授業の様子はビデオで録画し，児童の様子は採録された音声と背中側からの観取りで行った。検証授業は同日に学年を変えて2種類行った。

4.2 読みあいの身体性とともに促進する理解(1)：“The Happy Day”

4.2.1 実施の背景と絵本解説

まず，中休みを使い自由参加の「おはなし会」の形式で読みあいを行った。参加した児童は低学年1年生から3年生までの37人。授業ではなく任意のおはなし会であるから，そこに集まってきた児童は，英語か絵本か，あるいは大学生の授業に興味を持ってやってきたと考えられる。先にこうした自由参加の形式をとっていただいたのは，大学生の慣れを促すための小学校側のご配慮でもあった。休み時間に行う，任意の会ということもあり，教室に集まってくる児童たちは興味津々のようであった。そこを大学生がうまく拾い上げ，学年を聞いたり，普段の休み時間の過ごし方を尋ねたりしながら，読みあいの場を作っている様子であり，こうしたところに教育実習などの経験を十分に積んでいる成果がみられた。

休み時間の英語絵本読みあいに使用した絵本は“The Happy Day”は邦題『はなをくんくん』で，後日児童が自分の理解を確かめたり，補ったりできるように邦訳の絵本が図書館に所蔵されていることを確認して選書した。絵本の選定基準は，松本（2017b）に詳しいが，おはなし会の成否は選書によって50％が決まると言われているので，専科教員や司書教諭に児童の様子，また読書傾向も確認し，本稿筆者が慎重に選定した。

この絵本作品は，墨絵のような美しい白黒の濃淡だけで，雪に閉じ込められた森の静けさと，その雪の下に潜む動物たちの息づかいを描き出し，その絵と同調するリズミカルでシンプルな英語で，見事な作品に仕上がっている，コルデコット賞のオナー賞となった作品である。物語の舞台は雪に埋もれた森の中，やがて春が訪れようというある日，動物たちもやがて眠り（sleep）から覚め，鼻をクンクンと蠢かし（sniff）走って（run）集まってきたところには，春の花が咲いていて，春の訪れに喜びの笑いがこみ上げ（laugh）踊ってしまう（dance）という展開である。なぜ“The Happy Day”というタイトルなのかは最後に明らかになるが，その物語のテーマともいえる happy day である理由も含めて，児童に理解させたいと考えて，授業案を組んだ。

4.2.2 読みあいの実施

英語絵本の読み聞かせは通例2回読んで聞かせている。1回目は全体のストーリーを理解させることに専念させる。1回目の読みでは児童は話を熱心に理解しようと聞いており，目立った反応は示さない。2回目に，自分の記憶を確認し安心して反応してくるものである。この検証授業時も，1回目読みでは大学生一名が絵本を持って本文を読み，もう一名は，絵本に使われている動物名が読まれた時には動物の絵を指でさし示し，英単語の音声と絵を結びつけて理解を促す程度にした。2回目の読みでは，上記に示したような身体の動きを伴う動詞ついて，単語の発音をしながら，その動きを授業者がジェスチャーで行い，児童にも同じ動作をさせた。「run」と言いながら，実際に走ることで単語の知識を机上のものではなく，体験を伴う理解になるように促した。また，授業者と児童や，児童同士が同じ動作をすることで，相互交流を深めることにもなる。最初の動作では少し戸惑ったような児童も見られたが，担任の先生方がすぐに加わってくださり，最後に動物たちが雪の中に花が咲い

ているのを見つけ，春の訪れを感じるという物語のクライマックスも理解し，run-laugh-dance と動作が続くところでは特に盛り上がっていた。ここは花を見つけた喜びを体感してもらうために，教室読みには少し大きさが足りない絵本画像に加えて，色画用紙で，絵本の最後の場面に描かれている小さな花を作りして，使用した。

児童の反応は良好で，2 回目の読みでは，絵本に出てくる動物たちの動作を正確に理解し動いていた。絵本に出てくる動作を，授業者が読み上げ，その通り体を動かすという一連の流れは，ちょうど休み時間にもマッチし，リラックスもしてもらえた。ただし雪に埋もれた冬を過ごし，春の訪れを待つという気候ではない地域なので，最後の花が咲いているのを見つけて思わず笑いがこみ上げ，踊り出すという心情をどの位理解してくれたのかは疑問であるが，そのことはいつか“The Happy Day”というタイトルの意味とともに各々気づいてくれたら良いと感じた。この本はまさに文科省が言うところの「絵本の絵から情報を読み取り，状況を理解しながら，児童は相手の話を聞くことになるため，「聞いてわかる」体験をさせやすい。」（「中学年を対象とした絵本活用に対する基本的な考え方」）英語絵本の読み聞かせになった。

4.3　読みあいの身体性とともに促進する理解(2)：“Tap the Magic Tree”

4.3.1　実施の背景と絵本解説

中休みのおはなし会に引き続き，第 3 校時を 1 コマいただいて，絵本を使った授業をさせていただいた。小学校 1 年生の 2 クラスを，合同授業で行わせて頂いたため，授業は通常教室ではなく音楽室を使って行った。児童出席数は 45 人である。45 分という正規の授業時間であり，英語絵本の読みあいとその後の展開活動を中心とした授業（付録参照）とさせていただいた。

学習のめあては，「身の回りにある自然（季節）と色を英語で感じよう」に決定したが，これは前項の中休みのおはなし会でも共通のテーマにした。豊かな自然に囲まれた立地の特性と，実施時期がちょうど 3 月 3 日の桃の節句に当たり，季節の移り変わりを認識させることが重要だと考えたためである。季節感の薄れゆく時代において，児童の未だ衰えない感性で，季節を意識させることや，身体の感覚を刺激することによって目覚めさせるということも，念頭にはあった。小学校低学年児童は，ピアジェの提唱する発達段階においては，感覚的操作期にあたり，理屈よりは感性が研ぎ澄まされていると考えられる。従って，一般的にこの学齢期は，英語という外国語にも臆せず触れることができて，言語外コミュニケーションを上手く使いこなしながら，言語コミュニケーションを体得することも得意であるとされている。また，理屈より感性が鋭い年頃であるので，絵本の絵を隅々まで感じ取ることにも長けていて，絵本の文言を理屈で理解しようとするよりは，あらゆる感覚を動員して，絵本の内容を総体として理解することができる。この点において，小学校中学年に始まる英語活動に英語絵本を取り入れよう，という文科省の方針は誠に理にかなったものであると言える。

この授業では，身の回りにある色の英語名を理解し，英語の指示に合わせて体を動かせるようになることをめざし，“Tap the Magic Tree”を取り上げた。

“Tap the Magic Tree”の邦題は『さわってごらん，ふしぎな ふしぎな まほうの木』であるが，厳密にいえば，「tap」という英語が表す動作と，「さわる」という日本語が表す動作は異なる。つまり，英語と日本語の表す意味にずれがあり，したがって翻訳は，必ずしも原案のすべてを訳している訳ではなく，原作者の意図を伝えるのに，最もふさわしい日本語を選んでいるということを，指導者は常に念頭におくべきである。

“Tap the Magic Tree”は，“The Happy Day”の墨絵のような美しさとは対照的に，色彩豊かに描かれている。一本の木に，様々な動作をすることによって，一本の木が，芽吹き，青々とした葉を繁らせ，花を咲かせ，実をつけて，やがて色とりどりに紅葉し，葉を落とすというように，姿を変えていく，そんな「magic tree」が中心に描かれている。やがて冬が訪れるが，魔法の動作をすることによって，また春が訪れる。季節感や，生命の輪廻もテーマに組み込んだ秀逸な作品でもある。

しかし，そこに主人公らしき登場人物は無く，読者に様々な動作をするように促す文言が命令文で書かれており，読み手が，目の前にいる聞き手に指示をしているように聞こえる。語り手の構造としては，木が語っているわけではないので，あくまでも声をだして読んでいる読み手が，聞き手に語り掛けるような，語り手の構造であろう。この点でも，児童と読みあう絵本にふさわしい。

4.3.2　読みあいの実施

この授業の中で教えた語句は，「tap，rub，touch，jiggle，wiggle，brush，blow a kiss，shake，pat，blow

a breeze，clap」の 11 個である。ここでも，1 回目の読みは，授業者が二人で行い，児童は絵本の内容を理解することに専念し，2 回目の読みで，授業者とともに身体を使って，読みに参加させるようにした。それぞれの動詞（または動詞句）の表す動作は，絵本の中で，木の幹に対して行うように命令されているのだが，児童に実施させる際には，木やホワイトボードなどに行うことはせず，自分自身の太ももを木に見立てて，各自で tap したり，自分の膝に touch したり，工夫して行った。少々難しい単語も，体を動かすことで，おおよそのところは理解し，その動詞が表す身体の動きを行えていた。また，体を動かすことで，各々の児童が，お話を聞いているだけといった受け身な態度にならず，積極的に読みあいに参加した。

こちらの選書も，身体性を取り入れた読みあいをしたいと考えて，選んだものである。先にも述べたように，実際に身体を動かしたり，身体で表現をするといった身体性を帯びるほどに，読み手の読みによって，児童に伝えられる音声とともに，自分の身体を動かすことが可能になり，意味理解が進み，定着も進むと考えたからである。

また，ガードナーの多重性知能理論によると，人間の知能は 8 つのタイプに分かれ，児童の知能型も一様ではない。英語の絵本を読みあうという活動の中で，児童自身も声を出したり，身体を動かしたり，身体表現をすることで，自分自身の可能性を引き出すことができると考えられる。

読みあいの活動ののち，Magic Tree になぞらえた，児童たちの Birthday Tree という誕生日月の季節で分けた 4 本の木を児童が作成した。この，絵本の展開活動については，別途報告するので詳細は延べないが，絵本の読みあいをした成果を，何らかの目に見える成果物に残すことは，自己充足感を高める上にも，大変重要である。

4.4　集団の読みあいの場の構築と絵本の内容理解

最後に，前述の活動を通じて，得られた成果をもう一つ報告する。小学校の英語活動は，まだ，継続的に実施されていないので，効果を検証することが難しい。一方で，初めて出会う児童についても，与えられた時間内，すなわち 1 回の授業でも，何らかの効果を上げなければならない。児童の知的好奇心を満たし，自己充足感を得て次回へのモチベーションにつなげなければならない。そうした単発の授業で効果をあげたいと願ったとき，教材となる絵本の選書や，授業案が重要であることは言うまでもないが，モチベーションの上がる環境作りが，かなり重要である。

別途行っている母子の読み聞かせの実験からも，コミュニケーションがうまくいくことが，理解を促進することもわかっている。絵本の読みあいについては，母子ではあるが，最初からコミュニケーションがうまくいくわけではなく，読みあいを何度か繰り返していただく中で，ページめくりのタイミングや，特定の場面で行われる身体動作や，表情の作り方など，徐々に歯車が合うようになっていった。読みあいは，まさに共同作業で伺いることができた。この母子の読みあいの結果を踏まえ，授業やおはなし会の最初に，アイスブレーキングを取り入れた。挨拶，歌，自己紹介，手遊びなどを使って，雰囲気づくりをしてから，本を読み始めるようにした。お互いに意志の疎通を図りやすくしておくことが重要である。

実際の読みあいに入ると，文部科学省が英語絵本の読み聞かせについて述べている通り，ジェスチャーをつけて表情豊かに読むこと，児童を絵本の世界に引き請うこと，ページめくりを利用して児童に興味をもたせることがもちろん大切であるが，実際に読み手は何をすればよいのか，また動作や表情とは具体的に何なのか，という詳細も，読みあいに使用する絵本ごとに考えていかなければならない。いわゆる教材研究が欠かせないのである。

小学校英語活動における英語絵本の読みあいは，集団に対する読みであることも忘れてはならない。30 人の集団に伝えるためには，10 人や 5 人の小集団と読みあうのとは，違った工夫が必要である。適切な声の表情やボリューム，児童からも見えやすく，分かりやすい身体動作，身体表現でなければならない。どんな身体動作も身体表現も，まず授業者がやって見せて，テンポ良く繰り返させることが重要であるし，そのときに強調してやってみせることも大切である。むしろ，演じると考えた方が良いだろう。そうなると，もちろん絵本の文言はすべて暗記しておかなければならない。読み手が，絵本の文言を読んでいるようでは，児童と相対することができず，読みあいというコミュニケーションができなくなってしまう。児童の英語の習得を促進させる，より良い読みあいを目指していくことが重要である。

5. まとめと今後の展望

本稿では，2020 年に必修となる小学校 3，4 年生の英語活動において，英語絵本の読み聞かせが導入される経緯と文部科学省がその英語絵本の読み聞かせに求めている効果を述べた。これまでの様々な分野の研究により，幼児への絵本の読み聞かせが，幼児の発達に一定の効果があると言われているので，小学生児童への英語絵本の読み聞かせが，何らかの効果を上げることは否定しないが，ただ読み聞かせるだけでは，難しいことも否めない。文部科学省が，「中学年を対象とした絵本活用に対する基本的な考え方」で留意点として述べていることを，もう少し詳細で具体的なものにする必要があると主張した。児童に読み聞かせる言語が母語ではなく英語であるため，読み聞かせの方法も第二言語習得理論に則ったものでなければならない。英語絵本の読み聞かせが依拠できる理論として，Krashen のインプット仮説と，Long のインプットーインタラクション仮説をとりあげ，前者に従い，身体動作，身体表現といった本稿が主張する「身体性」を生かし，読むこと。また後者のインプットーインタラクション仮説に基づき，読み聞かせではなく，読みあいを提唱した。身体性を伴った読み手の読みを以て，読み手となる授業者と，児童が同じ絵本を読みあうことで，読み手と児童のコミュニケーションが促進されて，児童の英語理解も進むと考えた。本件は，公立小学校にて 2017 年 3 月 3 日検証授業を行わせていただいたが，今後さらに，読みあいの仕方を工夫改善して，授業対象校も，教材として扱う英語絵本も増やす必要があると考える。引き続き本課題に取り組み，より良い英語絵本の読みあいで，児童の英語習得を促進することを目指したい。

謝　辞

検証授業を行わせていただきました小学校の校長先生と児童のみなさん，また授業者として絵本の読みあいを行ってくださった池田愛里さん，前田優衣さんに心より御礼申し上げます。

註

1）正式な科目名としては「外国語科」及び「外国語活動」であるが，それぞれ学習指導要領には外国語科については「第 3 指導計画の作成と内容の取扱い 1 外国語科においては，英語を履修させることを原則とすること。」（下線本稿筆者）とあり，外国語活動についても「第 3 指導計画の作成と内容の取扱い 1 外国語活動においては，言語やその背景にある文化に対する理解が深まるよう指導するとともに，外国語による聞くこと，話すことの言語活動を行う際は，英語を取り扱うことを原則とすること。」（下線本稿筆者）と原則として英語を取り扱うことが明記されている。従って，本稿でも必然性のある場合を除き，外国語ではなく英語，外国語活動ではなく英語活動と表記する。

2）文部科学省ホームページ「小学校の新たな外国語教育における補助教材（Hi, friends! Story Books）作成について（第 3・4 学年用）」http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1370103.htm　（最終アクセス日 2107 年 10 月 1 日）

3）視覚障者も楽しめるような音の出る絵本や，また乳幼児が玩具として一人で遊べる音の出るものが存在するが，本稿では考察対象としていない。

4）以降議論では，上記註 1）にあるように文部科学省の方針に合わせて，外国語活動は英語活動と言及，表記し，外国語科は英語科と言及，表記する。

5）ここで言うインプットとは，元々は Krashen（1977）によって主張された「言語習得は少しの手助けがあれば理解できるくらいのレベルのインプットを与えられたときに促進される。」というインプット仮説におけるインプットを指す。このインプットは単純に意味が分かるだけでなく，実体あるいは実感と結びつけられるようになった段階でインテイクと呼ばれる。

6）また，石川（2017）は『臨床発達心理学を基盤とした絵本の読み合い遊びと子どもの育ち』において，やはり読み聞かせと読み合いを前段のように区別しながら，読み合い遊びという概念を提唱している。読み合い遊びとは，参加する聞き手としての児童が段階を追って進歩するのと同時に，コミュニケーションの形態も読み聞かせから読み合い，そして読み合い遊びに発展すると述べている。石川（2017）がここで主張する読み合い遊びとは，絵本の中の場面を，現実世界につなげて遊びを展開することによって，発達障害を持った児童が，現実世界の遊びに参加できるようになった非礼を紹介している。本稿では，読み合い遊びは提案しないが，絵本の内容と関連つけた遊びや活動を授業の中で行うことは，小学校英語活動の中では日常的に行われており，本稿で紹介する 1 例目の “Tap the Magic Tree” の授業でも，その後 magic tree に見立てた誕生月ごとの季節の木を作るところで完成する。また，本稿では，読みあいという場が構築されるように，授業者が留意することももちろんだが，どのようにして聞き手である児童を読みあいの場に誘うのかが有効であるのかを検証した。

引用文献

Arizpe, E. and Styles, M. “Children Reading Picturebooks”. Routledge, Oxon. 2016.

生田美秋・石井光恵・藤田朝巳編『ベーシック絵本入門』ミネルヴァ書房 2013
今井靖親・中村年江「絵本の読み聞かせに関する心理学的研究Ⅳ」『奈良教育大学　教育実践研究指導センター　研究紀要』2. 67−75, 1993
石川由美子「臨床発達心理学を基盤とした絵本の読み合い遊びと子どもの育ち」国際幼児教育学会第 38 回　台北大会シンポジウムⅠ（口頭発表）2017
Krashen, Stephen D. “Principles and Practice in Second Language Acquisition”.
http://www.sdkrashen.com/content/books/principles_and_practice.pdf
（最終アクセス日　2017 年 10 月 1 日）
Long, Michael. “The role of the linguistic environment in second language acquisition”. In Ritchie, William; Bhatia, Tej. Handbook of second language acquisition. San Diego: Academic Press 1996
松本由美「英語絵本の読み聞かせの身体性と聞き手の理解」『玉川大学学術研究所紀要』第 22 号，2017a
松本由美「小学校英語教育における教材用英語絵本選定基準の試案―絵本リスト作成に向けて―」『玉川大学リベラルアーツ学部研究紀要』第 10 号，2017b
松本由美・梶川祥世 「英語絵本の読み聞かせと幼児の語彙獲得」国際幼児教育学会　口頭発表　2016
文部科学省 「学習指導要領解説　小学校外国語活動編」2008
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfle/2009/06/16/1234931_012.pdf
（最終アクセス日　2017 年 10 月 1 日）
文部科学省「中学年を対象とした絵本活用に対する基本的な考え方」2016
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/__icsFiles/afieldfile/2016/05/02/1370109_1_1.pdf
（最終アクセス日　2017 年 10 月 1 日）

検証絵本

“The Happy Day”
（著）Ruth Krauss,（絵）Marc Simont
HarperCollins (1989/1/15)　ISBN-13: 978-0064431910
1950 Caldecott Honor Book

“Tap the Magic Tree”
（作）Christie Matheson Greenwillow Books (2013/8/27)　ISBN-13: 978-0062274458

【付録】検証読み聞かせ実施時　事前に小学校に提出した企画書（一部抜粋）

英語絵本読み聞かせ企画案（小学校１年生）：“Tap the Magic Tree”

企画責任者　玉川大学リベラルアーツ学部
松本　由美

研究主題：絵本を楽しみながら英語に親しもう
ね ら い：英語絵本を楽しみ，体を動かしながら英語らしい音声に慣れ親しむ
授業の流れ：

【慣れ】児童のみなさんとあいさつをする　歌って授業への慣れをする　①②で３分

①授業者自己紹介
② Hello Song（1 分）

【活動 1】英語の歌を楽しみ，色の言い方を復習する　③ 10 分　④ 5 分

③ Rainbow Song を一緒に歌う（CD 使用）
④タッピング ゲーム…指示された色をタップするゲーム
（本来はタッチングゲーム，ここでは次の絵本のために tap の動作を導入）
➡復習時に“Planting a Rainbow”という絵本を使用。

【活動 2】英語の絵本を楽しみ，季節の言い方を体感する　⑤ 11 分　⑥⑦で 11 分

⑤ Tap the Magic Tree（2 回読みます）
⑥「季節の木」をつくるアクティビティ
模造紙に描かれた木の幹に配られた自分の名前の「葉っぱ」を貼り，みんなで（児童をあらかじめ誕生月で分けて着席させる）季節毎の木を作る
⑦みんなで写真

【振り返り】ほめとあいさつ　⑧ 3 分

⑧ Goodbye Song

****

英語絵本読み聞かせ企画案（小学校２～４年生）：“The Happy Day”

平成 29 年 3 月 3 日（金）中休み
企画責任者　玉川大学リベラルアーツ学部
松本　由美

絵　本：“The Happy Day”（邦題：「はなをくんくん」）
ねらい：①英語のお話を楽しむ　②体を動かしてお話を楽しむ　③季節を感じる
準　備：児童を落ち着かせてお話を聞く準備をさせる（手遊び“Open Shut Them”）

①輪になって座り，一回読み聞かせ（可能であれば，椅子を輪に並べる）
②二回目読み聞かせ，読みながら指導者の動作に合わせて sleep，sniff，run（小走り），stop，laugh，dance，の動作を児童も一緒に楽しむ。
③最後の黄色い花を見つけるシーンは黄色の紙で作った花を用意しておき，季節を感じる。